

ずいそう



家庭菜園—春夏秋冬

河井謙逸

「一病息災」という題でこの欄に随想を載せてから、いつのまにか、10年の歳月が経ちました。確か、突然の妻の発病から我が家の生活改善を決意した経緯と快方の兆し、を書かしていただきましたが、さて、その後は如何に……。

コブシが白い花を咲かせ、沈丁花の香りが甘く漂う頃になると、家にこもっていた菜園仲間もやわらかい日差しを求めて畑に通い出す。土を耕し、ジャガイモの種を植える作業が待ち構えているのだ。種イモは二つに切り断面に草木灰をまぶして10センチ程度の深さに埋める。3週間もすれば土の表面に亀裂が走りそこから芽が空を突き刺すように出てくるからずい。

冬の間、土に隠れ、目立たなかったタマネギや絹さやも一雨毎に背筋を伸ばし緑が濃くなっていく。よくぞ、寒さに耐えがんばってくれたものだと、誉めながら雑草取りや支柱立てをする。そして彼岸を迎える頃には、大根、ほうれん草、小松菜の種まきも済ませ、片隅に作った苗床ではトマト、ナス、キュウリ、ピーマンなどの夏野菜の苗作りの準備も完了する。僅かひと月ほどの間に、あれよあれよと大車輪の活躍ぶり。これでまた、今年も太陽と土の恵をたっぷりと頂戴することが出来るのだ。

この10年来、私は春をこのようにして迎えている、生態系の一員として季節の中で生かし生かされていることの有難さを実感しながら。

夏になると、「早起きは三文の得」が身にしみて感じられる。昼の猛暑や夜の不快指数とは全く無縁、澄み切った早朝の空気と爽やかな風を全身に浴びながら妻と散歩をする。途中、菜園に立ち寄り、野菜にたっぷり水遣りをし、それからおもむろに収穫をする。とげで刺さりそうなキュウリ、紫に光るナス、香りのプーンと漂うトマト、竹籠に入りきれない程の収穫に思わずニコリ。そうだ、公園でラジオ体操をしているご近所の皆さんにおすそ分けしよう。普段から落ち葉や生ゴミを鋤き込んで土作りをしているから、土地は肥え、実はふっくらとして

味も濃密、勿論、無農薬だから、何方も喜んでくれる。我が家と同じように、ご近所の今朝の食卓に、サラダや酢の物が登場し、食欲をそそっているのだろうと想像するだけで、心が和む。家内との会話もいつになく弾む中で、素敵な朝に感謝を込めて、まるごといただきます！

秋は春に次ぐ種まきの季節である。大根、カブ、ニンジンなどの根菜類、春菊、小松菜、ほうれん草などの葉菜類、それに、レタス、タマネギ、ブロッコリー、キャベツと欲をだせば、きりがない。まき時は春と違い神経を使わないと失敗する。春ならば、日ごとに、日も長く、光りも強くなり、まき時の幅が広いが、秋は違う。日差しが日一日と弱くなり、まき遅れると発芽しないし、早すぎれば残暑でこれまた枯れてしまう。タイミングが大事なのだ。今朝はサツマイモの畝にさぐりを入れてみる。随分大きなやつに手が触れたぞ、そろそろ掘ってもいいかな。公園の落ち葉で焼きイモをし、それをほお張る近所の子供たちの嬉しそうな顔と顔、そんな姿が目に見えようだ。

ああそうだ、霜の降りないうちに空豆と絹さやの種まきをしておかなければ。まだ、間に合うだろうか。

初冬の朝、バケツを提げて500m先の菜園に行く。6時頃は犬の散歩やウォーキングをする人も多く、2〜3組と声を掛け合う。バケツの生ごみを土に戻す。今朝はキャベツ、ブロッコリーの青虫取り、ピーンと張った葉にコロコロと露の玉が光る。朝日を浴びながら、土に深く根をはった大根を抜く。霜に耐えて厚い葉を繁らせた小松菜はそと根元から採る。冬大根のシッポの部分は辛い、おろしてちりめんじゃこに添える。真中から根元はなますか煮物に。葉っぱは味噌汁の具と一夜漬け、小松菜はさっと茹でおひたしに。いただきます。一口、季節がほのかに香り、自然の旨みで満たされる。腹からは歓声が聞こえるようだ。ああ、何と贅沢な食卓。生き物は生きる為に必要なものを過不足なく持っており、それをそっくり戴いてこそ、一つの命、一つの小宇宙を戴いたことになる。一つのを丸ごときちんと戴く事で命を受け継ぐという一物総体の思想こそ大切である。

病がきっかけで、家内共々この10年、かえって楽しく元気な暮らしをすることが出来ました。これも、土の恵をタップリといただき、適度な散歩と笑いのある生き方を心掛けているからでしょうか。

太陽と水と土に感謝。良き人々に感謝。お蔭様で、ありがたいことです。